

食農リテラシーを高めるための幼児を対象とした 家畜介在教育に関する研究Ⅱ

—家畜の代替としてのウサギの適切な飼育ガイドライン—

谷田 創 木場 有紀 金岡 美幸 池田 明子
掛 志穂 洲濱美由紀 君岡 智央 久原 有貴
井上 由子 山中 覚美 東 加奈子 磯村 亜紀
有村 由香

1. はじめに

本研究の目的は、幼稚園及び保育園の幼児を対象として、食農リテラシーを高め豊かな人間性を培うことができる家畜介在教育（Farm Animal Assisted Education for Children：FAAEC）の発展を目指すことである。食農リテラシーとは、人間生存の基本となる食とそれを可能とする農及び自然環境に関する認識、評価、実践を総合した能力のことであり、その能力を生命に対する認識とともに一体的に獲得するためには、畑作や稲作の体験だけではなく家畜介在教育が必要であると考えられる。しかし、幼稚園や保育園において実際にブタやウシなどの大型家畜を飼育することは不可能であるため、幼稚園の飼育動物、特にウサギを家畜の代替として教育に導入し、土、作物、家畜、糞尿、堆肥、そして土への循環、そして動物の飼育体験を行わせることが可能なのではないかと考えた。

また一方で、動物との触れ合いによって、子供の発達が促進されるという側面にも注目が集まっている。子どもの発達には、幼児期に能動性を十分に発揮させることが重要で、具体的で直接的な体験を積み重ねさせる必要があるとされている¹⁾。そのためには、日常生活の中で、子どもたちが興味と関心を抱く対象を包含した環境を構築することが特に重要であるとされているが、身近な遊び場所の減少や子どもを狙った犯罪の多発などのために、日常生活の中で自然と触れ合いながら伸びやかに成長する機会は少なくなっている。元来、人間にとって動物とは、自然な流れで積極的に関わりを持ちたいと感ずることが出来る興味の対象であり²⁾、実際にペットを飼育していることや動物との

触れ合いの機会を持つことが人間にとって精神的、身体的に肯定的な影響をもたらすことも明らかにされている^{3,4)}。また、近年、犯罪の低年齢化や凶悪化を示す事件が頻発していることから、心の教育の重要性が指摘されており、子どもにとって一番身近な自然である学校飼育動物に対する関心も高まりを見せている^{5,6,7)}。最近では学齢期の子どもに対する動物の教育的効果⁸⁻¹⁰⁾が着目され、学校における動物介在教育の有用性が認められつつある¹¹⁾。しかし実際には、学校における動物飼育が形骸化し、その機能を果たしていないことも指摘されている。

2001年に開催された第9回人と動物との関係に関する国際会議（以下IAHAIO）では、学校教育における動物についてのリオ宣言〔The IAHAIO Rio Declaration on pets in school〕が発表された。リオ宣言では、子どもたちと接する動物が安全かつ健康で、教育現場に十分適応しており、動物福祉に則った適切な飼育管理が行われなければならないことを強調している。さらに宣言は、教育目標に「動物に限らず学校の様々な教育カリキュラム全般において知識及び学習意欲を向上させること」「人間以外の生命に対しても尊敬の念と責任感を高めること」の二つを必ず含み、「それぞれの子どもの感情表現能力と参加状況を考慮して教育目標を立てること」を求めている¹²⁾。子どもたちは動物とともに生活して行く中で、教師の適切な指導を求めていることも指摘されている¹³⁾。動物との触れ合いが子どもにとって有意義な機会となるためには、子どもに教える立場である教師が動物飼育に関して正しい知識を持ち、よりよい飼育環境を目指しなが

Hajime Tanida, Yuki Koba, Miyuki Kaneoka, Akiko Ikeda, Shiho Kake, Miyuki Suhama, Tomochika Kimioka, Yuki Kuhara, Yuko Inoue, Satomi Yamanaka, Kanako Higashi, Aki Isomura, Yuka Arimura, "Improvement of agri-food literacy for children through farm animal assisted education II"

ら教育を行うことが重要であると考えられる。そこで本研究では、幼稚園において家畜介在教育プログラムを実施するための基礎情報を収集することを目指し、広島県内の私立幼稚園200園を対象として飼育の現状の把握とその問題点を明らかにするためのアンケート調査を実施した。

2. 方 法

①調査対象：財団法人広島県私立幼稚園連盟に加盟する私立幼稚園200園

②実施時期：2007年6月～2007年7月

③調査方法：調査は全て郵送アンケートとした。アンケートの回答者は飼育担当教員、またはそれに相当する者とした。アンケートの概要を以下に記す。

【全ての幼稚園を対象とした質問】

・幼稚園における動物飼育の有無及び過去の飼育経験（選択式）

【過去に動物を飼育していた幼稚園、現在動物を飼育している幼稚園を対象とした質問】

・鳥インフルエンザの流行時に鳥類飼育をしていた場合の対応（自由記述式）

【過去に動物を飼育していた幼稚園のみを対象とした質問】

・飼育をやめた理由（自由記述式）

【現在、動物を飼育している幼稚園のみを対象とした質問】

・飼育している動物種（自由記述式）

※対象となる動物種は哺乳類、鳥類、および先行研究において爬虫類の中で最も多く飼育されていたカメとした¹²⁾。

・飼育に関する苦情の有無（自由記述式）

・動物飼育に関する悩み（自由記述式）

・動物の罹病時の対応（選択式）

・動物飼育で困ったときの助言者の有無（自由記述式）

・動物飼育の教育目的の有無（自由記述式）

・教育目的がある場合、目的達成のための具体的な取り組み（自由記述式）

・飼育動物に対する印象（自由記述式）

【現在、動物を飼育している幼稚園の中でウサギを飼育している幼稚園のみを対象とした質問】

・飼育頭数と性別

・ウサギ以外の動物との混合飼育の有無（している場合はその動物種）

・去勢・避妊の有無

・入手先（選択式）

・給餌飼料（選択式）

・1日の給餌回数と時間帯

・給餌量

・罹病経験の有無（有る場合はその病名）

・季節（暑さ、寒さ）対策（している場合はその内容）

・導入しているウサギ用の飼育関連器具（選択式）

・屋外飼育の場合の床の材質（選択式）

・屋外飼育の場合の飼育場所（選択式）

・ウサギを幼稚園で飼育する上で気になっていること（自由記述式）

④統計処理：飼育動物に対する印象の分析には χ^2 検定を用いた。

3. 結 果

①回収率及び飼育状況

112園より回答が得られた（回収率56.0%）。112園中、現在動物を飼育している幼稚園は82園（73.2%）で、過去に飼育したことがある幼稚園は16園（14.3%）、全く飼育したことがない幼稚園は14園（12.5%）であった。

②飼育をやめた理由（過去に動物を飼育していた幼稚園16園のみを対象とした質問）

理由の多くは「長期休暇中の世話が困難（31.3%）」「ヘビやイタチなどによる被害（25.0%）」「人畜共通感染症への危惧（18.8%）」「飼育小屋の移転・撤去（18.8%）」など、主として人間側の要因であった。（図1）。

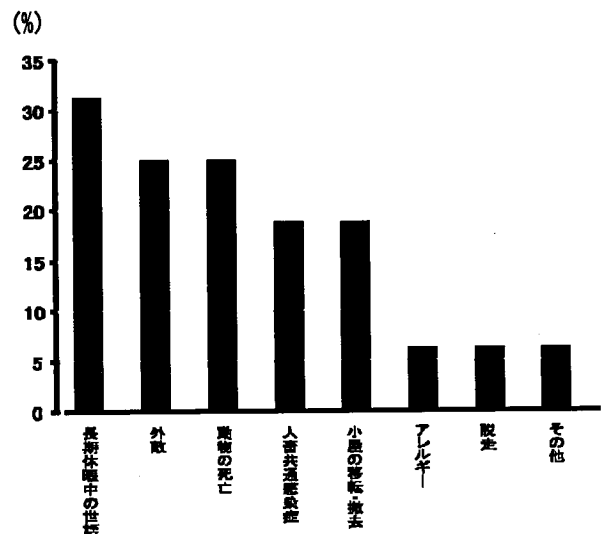


図1 飼育をやめた理由

③鳥インフルエンザ流行時における対応（過去に動物を飼育していた幼稚園及び現在動物を飼育している幼稚園98園を対象とした質問）

51園 (52.0%) から回答が得られた。主な対応としては「子どもたちと鳥類とのふれあいの制限 (33.3% : 51園中以下同)」が最も多く、次いで「小屋の周囲をカバーで覆うなど小屋の改良 (25.5%)」「手洗いとうがいの励行 (19.6%)」であった。少数ではあったが「飼育数を減らした (2.0%)」「飼育を中止した (2.0%)」という回答も見られた (図2)。

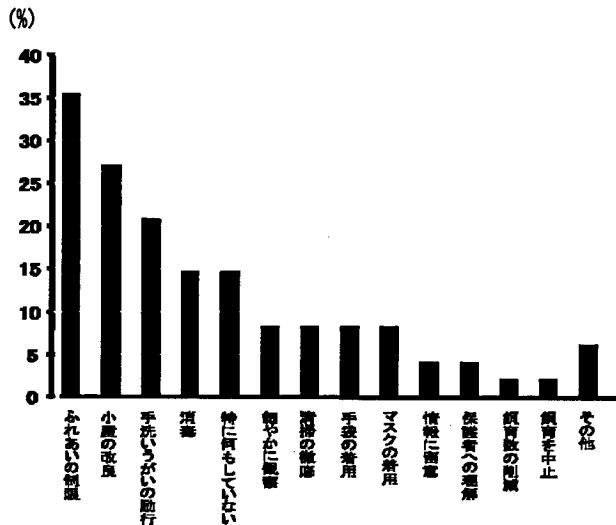


図2 鳥インフルエンザ流行時の対応

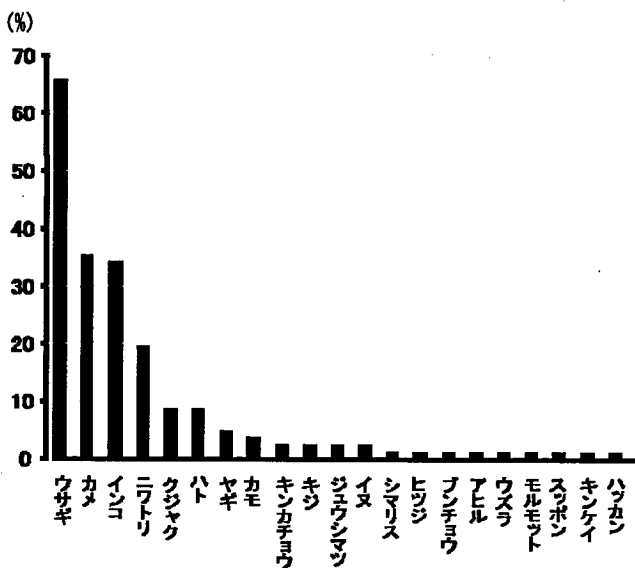


図3 飼育動物種

※インコにはセキセイインコ、オカメインコという回答を含めた
ニワトリにはウコッケイ、チャボという回答を含めた
ハトにはクジャクハト、ヤマハトという回答を含めた

④飼育動物種 (以下、現在動物を飼育している82園の幼稚園を対象とした質問の結果を示す)

幼稚園では21種類の動物が飼育されていた。ウサギ (67.1% : 82園中以下同) が最も多く、次いでカメ (40.2%)、インコ (40.2%)、ニワトリ (19.5%) であ

った (図3)。クジャク (8.5%)、ヤギ (4.9%)、イヌ (2.4%)、ヒツジ (1.2%) など比較的大型の動物も飼育されていた。また、個々の幼稚園における飼育動物の種類数は最多で9種類、最少で1種類であった。

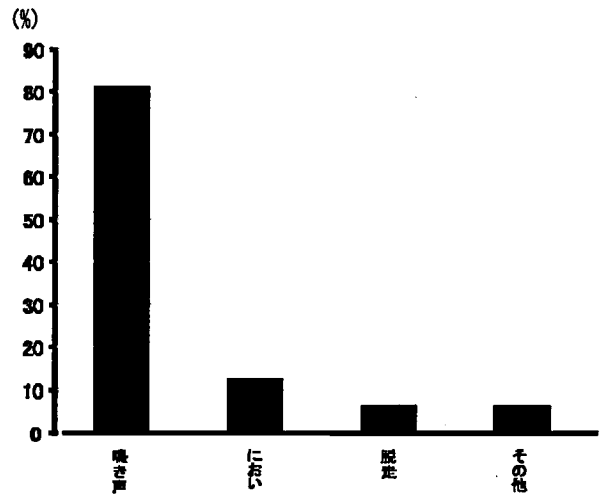


図4 苦情の内容

⑤飼育動物に関する苦情

16園 (19.5%) がこれまでに苦情を経験したことがあると回答した。無回答の1.2%を除き、そのほかの幼稚園では苦情を経験したことはなかった。苦情のほとんどは近隣住民 (93.8%) からのもので、それ以外は保護者 (6.2%) からであった。苦情の内容は「ニワトリ、クジャクなどの鳴き声 (81.3%)」が大半を占めていた (図4)。特に、クジャクを飼育している幼稚園の42.9%が鳴き声に関する苦情を経験していた。

⑥動物飼育に関する悩み

悩みがあると回答したのは27園 (32.9%) で、「繁

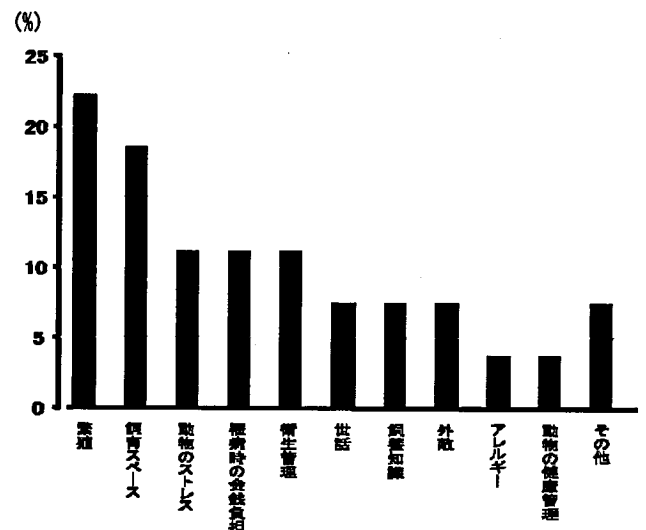


図5 動物飼育に関する悩み

殖に関する悩み」が6園と最も多かった(図5)。6園中4園は「繁殖が上手くいかない」、2園は「増えすぎて困る」と回答した。「増えすぎて困る」と回答した2園は共にウサギに関してであったが、「繁殖が上手くいかない」と回答した4園は、ウサギ、インコ、ニワトリ、シマリスに関してであった。「幼児が乱暴に扱うことがあり、ウサギが神経質になる傾向がある」「夏の暑さ、冬の寒さなどを自分で訴えることのできない動物たちの健康状態や気持ちを把握することの難しさを感じる」など、動物の福祉を考慮した回答もあった。

⑦動物の罹病時の対応

80園より回答が得られ、そのうち68.3%が「動物病院に連れて行く」、23.2%が「病院には行かず園で様子を見る」と回答した(図6)。

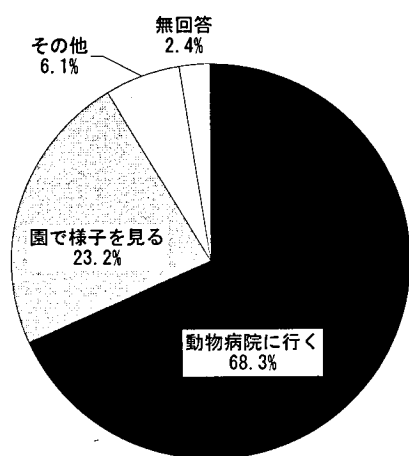


図6 動物の罹病時の対応

⑧飼育に関して困ったときの助言者の存在

79園より回答が得られ、そのうち57.3%が「助言してくれる人がいる」と回答した。助言者としては「獣医師(48.9%)」が最も多く、次いで「動物園飼育員(19.1%)」「飼育に詳しい幼稚園の同僚(12.8%)」「ペットショップの店員(8.5%)」であった。

⑨動物飼育の教育目的

72園の幼稚園(87.8%)が教育目的があると回答した。目的としては「命の大切さを学ぶ(62.5%)」「心の成長(45.8%)」といった心を育む教育に関する回答が大半を占めていた(図7)。

⑩教育目的達成のための具体的な取り組み

⑨で目的があると回答した幼稚園を対象に、目的達成のための具体的な取り組みについて質問したところ、

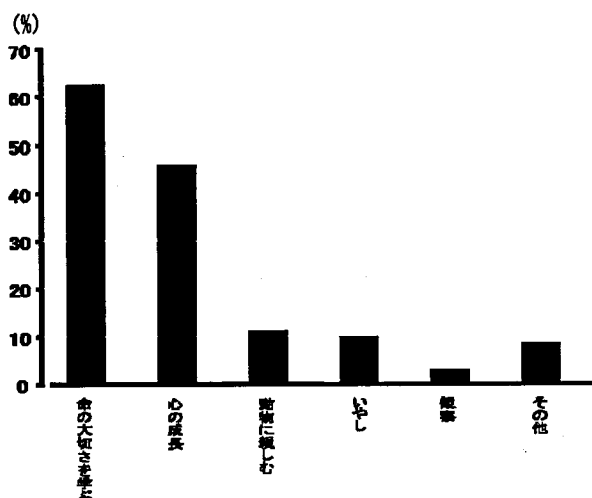


図7 動物飼育の教育的目的

ろ、53園(73.6%)から回答が得られた。「餌を手から与える」「園庭に囲いを作ってふれあう機会を設ける」など積極的にふれあいの機会をもつという回答が最も多く(34.0%)、次いで「当番で餌を与える、掃除を手伝う」など世話をさせるという回答が多かった(28.3%)(図8)。

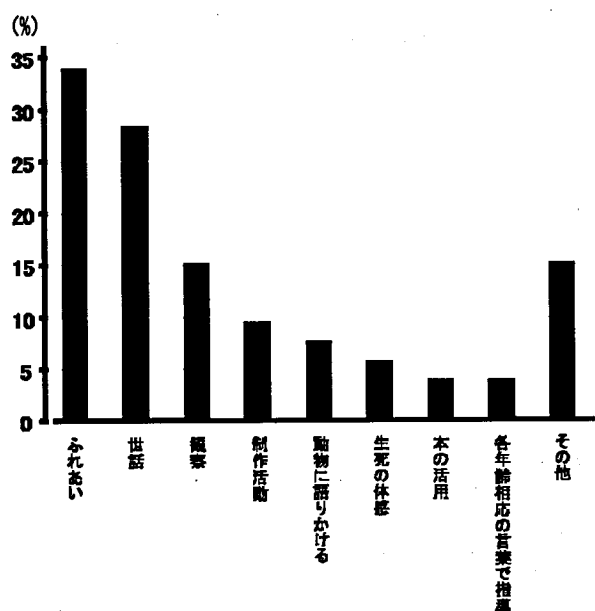


図8 教育目的達成のための取り組み

⑪飼育動物に対する印象

57園から回答が得られた。

自由記述式の回答を、子どもにとって良い影響に与える回答(例:子どもの成長には生き物の存在は大切、子どもの優しさが培われる)を[子ども+]、子どもへの悪影響を懸念する回答(例:感染症が心配でなかなかふれあう機会を増やせない)を[子ども-]、回答教員にとってポジティブな印象に関する回答(例:

かわいい、癒される)を[教員+]、回答教員にとってネガティブな印象に関する回答(例:怖い、死んだ時つらい)を[教員-]、動物飼育に関して前向きな回答(例:元気で長生きしてほしい、動物の体調の変動など人間と同じように気に掛かる)を[動物+]、動物の福祉を懸念する回答(例:動物が快適に過ごせているか疑問、小屋の環境が良くない)を[動物-]と分類し、それ以外を[その他]とした。[子ども][教員]についてはプラスの回答(それぞれ33.3%, 26.3%:57園中)がマイナスの回答(それぞれ1.8%, 3.5%)を有意に上回っていた(それぞれ $\chi^2=16.2$, $df=1$, $P<0.01$: $\chi^2=9.9$, $df=1$, $P<0.01$) (図9)。一方、[動物]についてはマイナスの回答(12.3%)がプラスの回答(7.0%)を上回っていたが、[動物+]と[動物-]の間には有意差は認められなかった($\chi^2=0.82$, $df=1$, N.S.)。

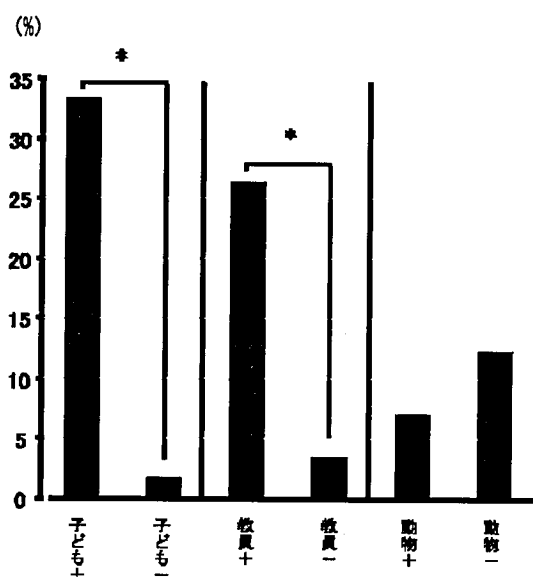


図9 飼育担当職員の飼育動物に対する印象

⑫ウサギの飼育状況(以下、現在ウサギを飼育している55園の幼稚園を対象とした質問の結果を示す)

1羽のみの飼育が22園と最も多く、83.6%(55園中以下同)が3羽以下の少数飼育であったが、中には10羽以上飼育している幼稚園も3園(5.5%)あった(表1)。飼育頭数別に雌雄把握状況を見てみると、「1羽」では比較の対象が無いためか、雌雄不明と回答している幼稚園も多いが、雄を飼育している幼稚園が多かった。2羽以上飼育している場合、雌雄の把握は繁殖コントロールを行うために不可欠であるが、雌雄を把握した上で別居させている幼稚園は2園で、複数のウサギを同居させているにも拘らず、性別不明と回答した幼稚園は9園存在した。また、飼育している

ウサギの去勢・避妊手術を「行っている」園は12園(18.8%)で、その他の幼稚園では「行っていない」(41園:74.5%)、「無回答」2園であった。雌雄混合飼育の園において、「雄は全て行っている」が2園、「雌は全て行っている」が2園、「一部のみ行っている」が2園、飼育頭数・雌雄に関係なく「全て行っている」園は6園であった。36園(65.5%)は飼育する性別を限る、雌雄の別飼育、去勢・避妊処置などによって繁殖コントロールを行っていたが、対策を講じないまま雌雄を同居させている園が30.9%(17園)存在した。

表1 飼育数別の雌雄把握状況

飼育数	オスのみ	メスのみ	雌雄同居	雌雄別居	性別不明	計
1羽	9	4			9	22
2羽	5	5	3		3	16
3羽		1	3	1	3	8
4~7羽			4	1	1	6
10羽以上			1		2	3
計	14	10	11	2	18	55

ウサギを他の動物と同じ空間で飼育している園は15園(27.3%)あった。混合飼育している動物の種類は、「インコ」9園、「カメ」4園、「ハト」2園、「ニワトリ」「チャボ」各1園であった。

ウサギの入手について選択式で尋ねた結果、「園児の持ち込み」が最も多く17園(23.6%)、「ペットショップ」「他の幼稚園」がそれぞれ10園(18.2%)、「職員の持ち込み」が3園(5.5%)、「その他」が24園であった。「その他」の入手先は「知人から」「小学校」「捨てられていたのを拾った」「新聞の広告で見つけて譲ってもらった」「動物園」「自園で生まれたウサギを引き続き飼育している」であった。

ウサギの餌として「市販のラビットフード」を与えている幼稚園が最も多く50園、「干草(乾草)」23園、「野菜」47園、「ウサギ用のおやつ」1園、「給食・おやつ等の残り」2園が続いた(複数回答:図10)。「野菜」では「キャベツ(31園)」「ニンジン(25園)」「ハクサイ(10園)」「レタス(9園)」「野草(7園)」「キュウリ」「サツマイモ(蔓含む)」「ジャガイモ」「ダイコン(葉含む)」(各2園)、「コマツナ」「シソ」「ナス」「ブロッコリー」(各1園)が挙げられた。「その他」のものを与えている幼稚園も14園あり、回答があったのは「果物(リンゴの皮含む:6園)」、「パン(5園)」「おから(1園)」であった。

「市販のラビットフード」と「野菜」を組み合わせで給餌している園が42園(76.4%)と最も多く、ラビ

ットフードと乾草の両方を与えている幼稚園は22園(40.0%)、ラビットフードのみを与えている幼稚園が7園(12.7%)、ラビットフードと乾草のどちらも与えていない幼稚園が5園(9.1%)あった。

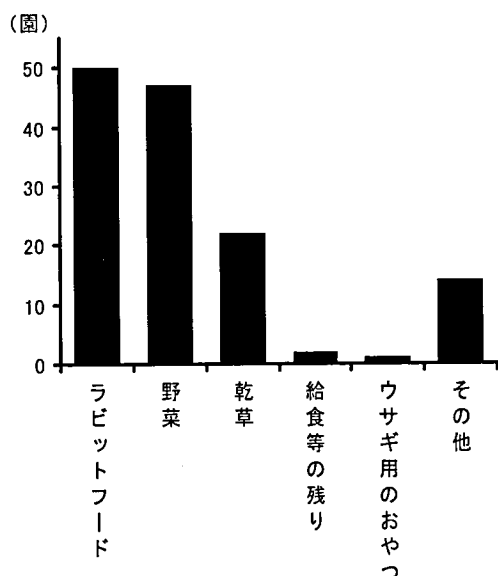


図10 ウサギに与えている餌(複数回答)

給餌回数は、「1回のみ」が31園、「2回」が21園、「2～3回」「3回」と回答した幼稚園がそれぞれ1園であった。給餌時間帯は、「朝(9時以前)」が39園、「午前中(9～12時)」が8園、「午後(12～15時)」が2園、「夕(15時以降)」が20園であったが、「決まっていない(無記入含む)」幼稚園も5園存在した。

ウサギへの給餌量は、「決めている」が33園、「決めていない」が21園であった。「決めている」幼稚園の中で、「150ccカップ1杯」「フードの記載にある規定量」など、数値的な目安を決めているのは17園で、「片手1つかみ」「食べきれぬ量」など、給餌者によって誤差が生じる可能性の比較的高い回答が10園で見られた。

飼育しているウサギが、今までに病気にかかったり負傷したりしたことがあった幼稚園は14園で、ない幼稚園は25園であった(無回答16園)。「ケンカによる負傷(3園)」「関節炎」「首が曲がる」「脱毛」「腫瘍」「スナッフル」「脱水症状」「不正咬合」「麻痺」「食欲不振」「便秘」(各1園)が挙げられた。

季節に応じた暑さ、寒さ対策について、「暑さ・寒さのどちらも対策をしている」が32園、「寒さのみ対策をしている」が13園、「暑さ・寒さのどちらも対策をしていない」が10園であった。暑さ対策の具体的な内容について尋ねたところ、「日陰を作る(よしず、すだれなど)」が23園と最も多く、その他「日陰や風通しの良い場所に移動させる(9園)」「飲み水を絶や

さない(6園)」「風通しを良くする(4園)」「打ち水をする」「床を工夫する(アルミ板を敷くなど)」(各2園)「池を作る(1園)」が挙げられた。寒さ対策としては「防風対策(ビニールで囲うなど)」が39園と最も多く、その他「床を工夫する(わらを敷くなど)」(7園)「屋内など、寒さを凌げる場所に移動させる(5園)」「毛布をかけて保温する(2園)」が挙げられた。

ウサギ用飼育関連器具の導入について、「巣箱」が17園、「かじり木」が27園、「その他」が8園、「導入していない」が10園であった。「その他」では、「ぬいぐるみ」「ヒューム管」「へちま」などが挙げられた。

ウサギを屋外で飼育している幼稚園における床の材質は、「土」が19園、「コンクリート」が24園、「砂」が6園、「その他」が12園であった(図11)。「その他」では、「すのこ」「F.R.P(合成樹脂)」「干草」などが挙げられた。

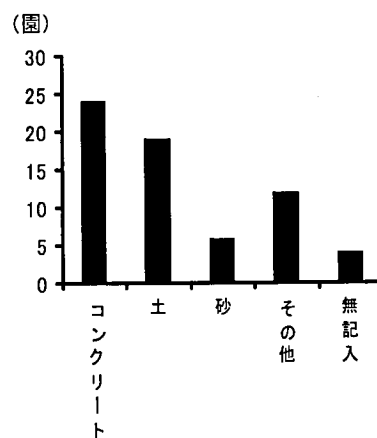


図11 ウサギを屋外で飼育している場合の床材

ウサギを屋外で飼育している幼稚園の飼育場所について、「門付近」6園、「保育室付近」9園、「園庭の隅」29園、「その他」8園であった。「その他」のウサギの飼育場所としては、「園庭のそば」「裏庭」「職員室付近」などが挙げられた。

現在、ウサギのことで気になっていることが「ある」とした幼稚園は24園あった。「気になっていること」を内容別に分類した結果、

- ・「体調」(ストレス、罹病など)
- ・「飼い方」(子どもとの触れ合わせ方、季節対策など)
- ・「環境」(生活空間の問題・改善など)
- ・「仲間関係」(ウサギ同士のケンカ、相性など)
- ・「食事」(食欲、与えて良い食べ物など)
- ・「繁殖」(出産による過剰増加、または産んでほしいのに産まない)
- ・「外敵対策」

・「死」

の要素が見られ、「体調」が10園、「飼い方」「環境」「仲間関係」「繁殖」がそれぞれ4園、「食事」が2園、「外敵対策」「死」がそれぞれ1園であった。

4. 考察及び今後の展望

回答のあった幼稚園の約7割が動物を飼育しており、動物種は21種類におよんでいた。これは過去の調査¹²⁾に比べてやや少ないが、その理由として本調査では動物種の対象にカメ以外の爬虫類および、両生類、魚類、昆虫類を含まなかったためである。最も多く飼育されていたのはウサギで、過去の学校飼育動物に関する調査でも同様の結果が報告されており、幼稚園におけるウサギの人気の持続していることが示唆された^{14,15)}。

鳥インフルエンザ対策に関しては、少数ではあるものの飼育を中止した園が認められた。また、その他の人畜共通感染症への危惧から動物飼育を止めた園も3園認められた。子ども達に対する安全対策と考えればやむを得ない処置かもしれないが、動物の飼育を教育の一環としてとらえた場合、危険だからという理由だけで即座に排除するのではなく、教員が人畜共通感染症についての知識を持ち、動物飼育を継続できるよう適切な対策をとるなど、生命を尊重する態度を見せることが重要であると考えられる。また、動物の罹病時に「病院には行かない」とする幼稚園は23.2%にも上ったが、子ども達と動物双方のためにも、専門的な診療を速やかに受けることが今後望まれる。

幼稚園がこれまでに経験した飼育動物に関する苦情の多くはニワトリやクジャクの鳴き声であった。特にクジャクに関しては飼育している幼稚園の約半数が苦情を経験していた。インドクジャクの雄は深夜や早朝に鳴き、その鳴き声は甲高く騒がしいが、マクジャクの鳴き声はインドクジャクの鳴き声よりは低く、落ち着きがあると言われている¹⁶⁾。これらのことからクジャクやニワトリを飼育動物として導入する際には性別や種に留意する必要があると考えられる。また、クジャクやキンケイなどの展示・観賞用の動物に関しては幼稚園を含む学校などの教育施設で飼育するよりも動物園の活用を考えたほうが良いとの指摘もある¹⁷⁾。さらに、過去に飼育していたが現在は飼育をやめたという理由の多くは人間側の認識不足や感情などであったことを考慮すると、動物を導入する場合は住民や保護者の理解を含む様々な要素を慎重に検討して動物種を選定すべきであろう。

動物飼育に関する悩みで最も多かったのは繁殖についてのものであった。繁殖に関する悩みについて、過去の調査では「繁殖の管理（増えすぎてしまう）」が

多くを占めていたが、今回の調査では「繁殖が上手くいかない」が過半数を占めていた¹²⁾。繁殖が上手くいかない原因としては性格や相性、年齢の他に病気や栄養不足、落ち着いて繁殖できる飼育環境が確保されていない可能性などが考えられ、繁殖計画を立てる際には動物の立場に立って繁殖しやすい環境を作る必要があると考えられる¹⁸⁾。

2001年にブラジルのリオで開催された第9回IAHAIOではリオ宣言として動物介在教育実施ガイドラインが発表され、動物を教育に導入することによって教育効果を得ようとするならば、AAEに導入される動物が適正かつ安全に飼育されていることが必要条件であること、また明確な学習目標を設定しなければならないことが強調された。本調査では約90%の72園が「教育目的がある」と回答したが、具体的な取り組みがあると回答したのは約65%の53園にとどまった。しかし、取り組みについての回答の中には「具体的な取り組みは特にないが、生き物の存在自体が目的になっていると思う」という意見も存在した。本来は具体的な指導計画を設定することが望ましいが、それが難しいとしても各幼稚園は生き物を飼育することの意味や意義、そして生き物に対してどのような立場をとるのかを最低限明確にする必要があると考えられる。

ウサギの飼育を主に担当している教員あるいは職員を対象としたアンケートであったが、飼育しているウサギの性別がわからないとする回答が3割を上回り、管理の行き届いていない現状が窺えた。ウサギの性別鑑別は、生後3ヶ月以降のウサギであればそれほど難しいことではなく、雌雄両性とも飼育している場合は特に容易であると言われている¹⁶⁾。子どもたちがウサギに興味を持ったり愛着を抱いたりしてウサギとの交流を深めていく中で、園において雌雄を把握しておくことは重要な意義を持つであろう。一方、同じ空間で2羽以上のウサギを雌雄混合で飼育している幼稚園も多く、さらにそれらの幼稚園はウサギ同士のケンカや過繁殖に困っているという回答をしていた。また、約3割の幼稚園が他種動物と混合して飼育しているが、これも管理上問題である。例えば本調査での混合飼育動物種の中で最も回答の多かった鳥類（混合飼育をしている幼稚園の77%）と同じ空間で飼育することにより、ウサギが鳥の鳴き声に驚いたり、くちばしでつかれて怪我をしたりすることは珍しいことではない。

ウサギには、ラビットフードと乾草を重量比2：1ないしは1：1を与えることが理想的であると言われている²⁰⁾。本調査によると、ウサギを飼育している幼稚園の9割が市販のラビットフードを与えているが、乾草を与えている幼稚園は4割にすぎず、乾草給餌の

重要性は十分に認識されていないことがうかがえた。乾草を与えている幼稚園は全てラビットフードと共に与えていたが、ラビットフードしか与えていない幼稚園が7園(12.7%)、ラビットフードと乾草のどちらも与えていない幼稚園も5園(9.1%)あった。餌の内容に関する知識は、ウサギを健康に飼育するために必要不可欠なものであり、飼養標準の普及が必要であると考えられる。

ウサギの適切な給餌回数・時間帯は、朝と夜の1日2回であるとされている²¹⁾。また、ウサギは夜行性で、日中よりも夕方から夜明けにかけて行動が活発になり、消化器官も夜に活発に働くことが明らかになっている²⁰⁾。このことから、本来は夜の給餌を充実させることがウサギにとって適切である。本研究では1回しか給餌しない園が6割にも上り、適切な給餌方法がとられていない園が過半数を超えていた。1日1回の給餌では、ウサギは十分な食事量を摂取できず、餌の鮮度低下も避けられない。人の飼育下に置かれた動物は、人から食べ物をもたらす以外に食事をとる術がないので、毎日元気な姿で子どもたちを迎えられるように、給餌内容及び給餌方法の見直しを図り、ウサギの体調管理に気を配ることが必要である。

近年、夏は記録的な猛暑となる傾向にあり、その影響は人だけでなく動物にもおよび²²⁾、動物の暑さ対策も多様化の傾向にある²³⁾。本調査の結果からもウサギの季節環境対策にそれぞれの幼稚園で工夫が見られたが、寒さ対策しかしていない幼稚園、季節対策をまったく行っていない幼稚園も多く、1年を通してウサギの生活環境を管理するという意識は低い傾向にあった。また、ウサギは隙間風、クーラー、扇風機などの直接的な送風は苦手であり²⁴⁾、季節対策を徹底している場合にも細かな配慮は欠かすことはできない。

飼育担当教員は動物の存在は子どもと教員の双方にとってプラスの効果が大きいと感じていたが、幼稚園で飼育することは動物にとってはマイナスになることも多いのではないかと感じていた。具体的には「子どもが幼いので乱暴な扱いがたまにある」「子どもの乱暴な扱いにより動物が神経質になる傾向がある」など、動物の福祉と教育との両立の難しさを挙げた回答と、「予算の関係もあり、飼育舎がウサギにとって居心地の良い空間でない」「日当たりなどが悪く小屋の環境があまり良くないため、可哀想との思いがある」など、設備面の不十分さを挙げた回答が認められた。

ウサギの飼育状況に特化したアンケートからも、幼稚園におけるウサギ飼育において改善すべき点は多く、また、自由記述回答においては飼育担当者のウサギの管理に対する意識や興味は個人差が大きいことが

示唆された。「ウサギ飼育に関して気になっていることがある」と答えた飼育担当者は約半数にも上る。更に、「気になっている」との回答者のうち、ストレス(体調)や飼育環境による影響など、ウサギの心理的問題を挙げた幼稚園が半数を超えており、ウサギを自分や子どもたちと同じような立場に置き換えて考えてはいるが、どうしていいかわからず対応に苦慮している様子が窺えた。しかし一方で、ウサギには罹病経験がない、ウサギについて気になっていることがないと回答した幼稚園であっても、飼育担当者がウサギの体調の変化や飼育環境の不備に気づくことができていない可能性も考えられる²⁵⁾。

では、これらの問題を解消するためにはどのような施策を行う必要があるだろうか。獣医師である中川²⁶⁾が「動物とのふれあいから、子どもたちに何かを学んで欲しいと思うなら、飼育が適切でなければならない。大人がその姿勢をきちんと見せることが、子どもたちに愛と思いやりと死を教えることにつながるのである」と指摘しているように、動物飼育によって教育効果を得ようとするならば、動物の福祉を念頭に置いて飼育しなければならない。また、人間と動物は言葉で通じ合えないために福祉的配慮は合理性に欠けた、独善的なものになってしまう危険性もあり、科学的根拠に基づいた動物に対する正しい知識を持つ必要がある²⁷⁾。そこで、今後は本調査で得られたデータを基にさらに研究を進め、学校飼育動物の飼育状況の評価方法やストレスを軽減する方法、動物の福祉と教育を両立させる教育プログラムなどを検討することが必要である。また、県や市単位で幼稚園の飼育動物を管理する機関を設け、管理圏内の幼稚園からの飼育動物に関するメッセージを受信・公開することなどの対策が必要であると考えられる。幼稚園同士の連携を図ることができれば、交流を通して問題を解決したり、動物を「飼いたい」という幼稚園と「譲りたい」という幼稚園の間での動物の譲渡も可能となるだろう。また、獣医師などの専門家の協力も得ることができれば、飼育動物の健康状態や管理方法に関しての相談や指導を受けることにも活用でき、多くの視点から飼育環境の改善が期待できるのではないだろうか。

さらに、今後の展開として、ウサギの飼育環境・世話の仕方・健康状態の診断とフィードバック、子どもとの触れ合いの機会の観察などの実地調査を行うことによって、教育法を確立することが必要であると考えられる。そのような取り組みにより、ウサギについての知識や、子どもとの触れ合い方などの指針を作成することを通して、まず幼稚園の教員にウサギに興味を持ってもらうことが、動物介在教育の発展と充実を図

- るための第一歩なのではないかと思われる。そしてその成果が、子どもたちの成長に還元されることが期待される。
- 1) 文部科学省：幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価，チャイルド本社，2-3. 2005.
 - 2) Levinson, B.M., *Pets and Human Development*, Springfield, IL, Charles C. Thomas, 1972.
 - 3) Krantz, D.S., Helmers, K.F., Bairey, C.N., Nebel, L.E., Hedges, S.M., Rozanski, A., *Cardiovascular reactivity and mental stress-induced myocardial ischemia in patients with coronary artery disease.*, *Psychosomatic Medicine*, 53: 1-12. 1991.
 - 4) Lynch, J.J., *The Language of the Heart: The Human Body in Dialogue*. Basic Books, 1985.
 - 5) 早坂絵里・青山真人・杉田昭栄：小学校における飼育動物への教員と児童の意識，ヒトと動物の関係学会誌，8：78-82. 2000.
 - 6) 廣瀬由美・増澤康男：学校飼育動物を通して児童が学ぶもの—ヒトと動物の多様な関係を認識することの重要性—，ヒトと動物の関係学会誌，15：84-88. 2005.
 - 7) 中島由佳・中川美穂子・無藤 隆・吉本恒幸・池田日佐子・小林道正：学年での動物飼育体験が子どもの動物への共感性および向社会的行動の発達に与える影響の検討，動物飼育と教育，6：43-46. 2007.
 - 8) 中川美穂子：学校飼育動物は，愛情と命を教える最高の教材・高柳友子・山口千津子・山崎恵子：Relatio, チクサン出版社，3：44-47. 2001.
 - 9) 町井富子・遠藤 忠：「生命」に関する幼保・小・中一貫総合カリキュラム開発の試み，宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター，28：11-20. 2005.
 - 10) Kotrschal, K., Ortbauer, B., *Behavioral effects of the presence of a dog in a classroom*, *Anthrozoos*, Published by University Press of New England for Delta Society, 16 (2): 147-159. 2003.
 - 11) 木場有紀・谷田 創：動物介在教育 (AAE) の効果と今後の課題—幼稚園におけるAAEを中心として—，*Animal Nursing*, 日本動物看護学会，9 (1)：49-57. 2004.
 - 12) 谷田 創・木場有紀：幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性，*日本獣医師会誌*，57 (9)：543-548. 2004.
 - 13) 鈴木さやか・夏目紘子・本田優子・村田 瑛・山崎千草：学校飼育動物に対する小学生の反応—「生命に対する教育」の必要性—，*Animal Nursing*, 日本動物看護学会，8 (1)：34-37. 2004.
 - 14) 石川 学・大原佳世子・土井章三・居神憲男・高橋峰男・松田政明：学校等における動物飼育の現状と問題点，*広島県獣医学会雑誌*，20：61-65. 2005.
 - 15) 大和田一雄・朱宮正剛：学校飼育動物の現状—山形県におけるアンケート調査結果から—，*実験動物と環境*，12 (1)：64-67. 2004.
 - 16) 社団法人日本獣医師会：学校飼育動物の診療ハンドブック，90-91. 2000.
 - 17) 鳩貝太郎・中川美穂子 編：学校飼育動物と生命尊重の指導—学校で動物を飼う意義と適切な管理について再考する—，*教育開発研究所*，116-119. 2003.
 - 18) 中川美穂子 監：学校飼育動物のすべて—子供とゆとりある飼育を楽しむために—，株式会社ファームプレス，65. 2000.
 - 19) 斉藤久美子：うさぎ学入門，*インターズー*，23. 2000.
 - 20) 斉藤久美子：ウサギの食餌管理，*動物臨床医学*，9 (1)：1-6. 2000.
 - 21) 大野瑞絵・井川俊彦・曾我玲子：ザ・ウサギ，誠文堂新光社，64-71. 2005.
 - 22) 朝日新聞：熱中症で高齢レッサーパンダ死亡 市川動物園，<http://www.asahi.com/life/update/0822/TKY200708220303.html>, 2007.9.9
 - 23) 産経新聞：記録的“炎暑”の夏 最高気温更新40.9度 熱中症大阪で360人…，http://www.sankei.co.jp/shakai/wadai/070831/wdi0708_31004.htm, 2000. 9. 9
 - 24) 大野瑞絵・村谷実樹・椎名さち：わが家の動物・完全マニュアル ウサギ，スタジオ・エス，76-81. 2006.
 - 25) Mullan, S.M., Main, D.C.J., *Survey of the husbandry, health and welfare of 102 pet rabbits*, *Veterinary Record*, British Veterinary Association, 159(4): 103-109. 2006.
 - 26) 中川美穂子：教育の現場と動物—① 学校飼育動物の現状，*Relatio*, 緑書房，2：39-41. 1999.
 - 27) 上野吉一：動物の福祉はなぜ必要か—動物福祉の理論と実践—②心理学的幸福の確立とその方策としての環境エンリッチメント，*アニマル・ナーシング*，日本動物看護学会，9 (1)：63-68. 2004.